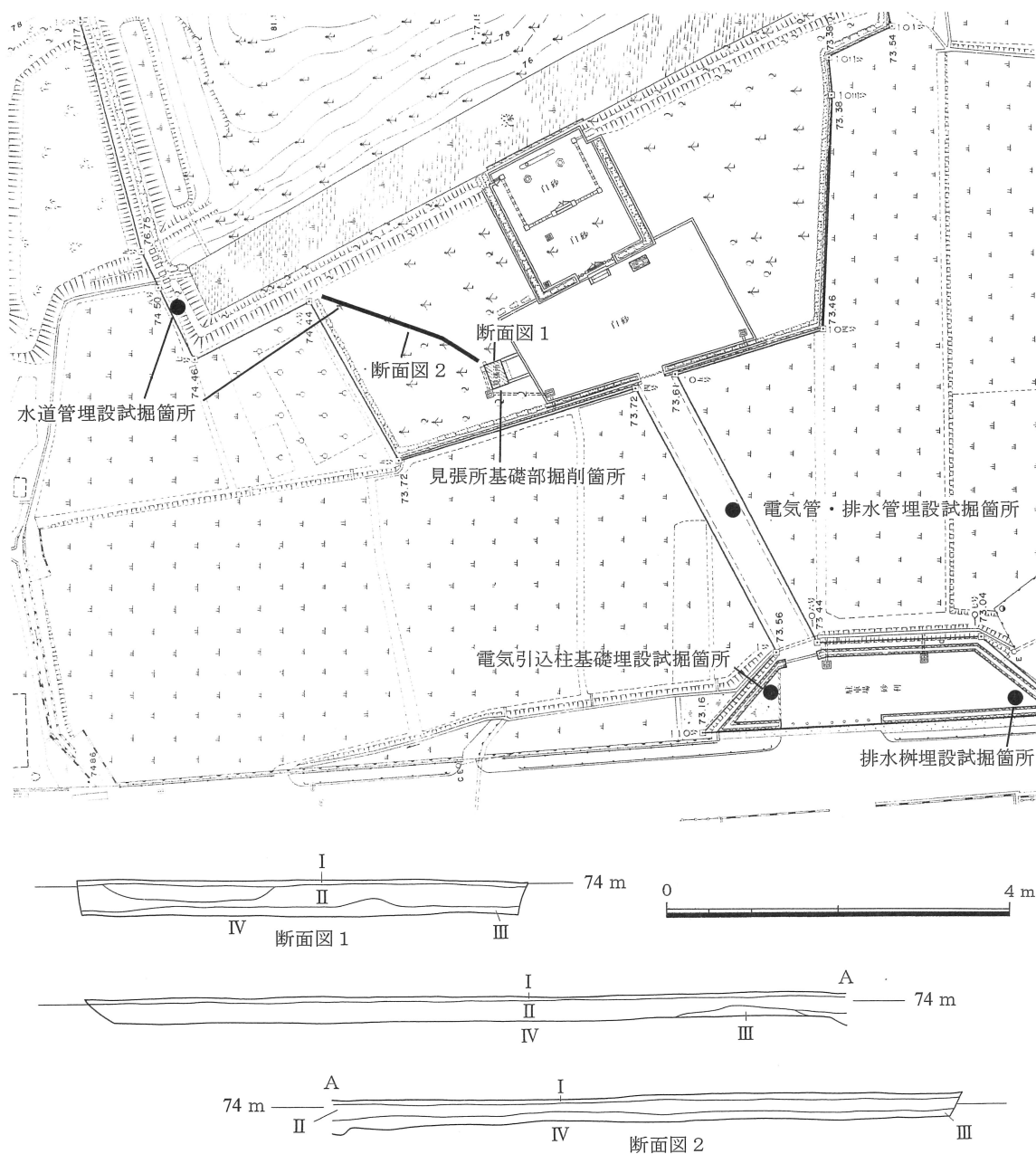


称徳天皇陵見張所改築その他工事箇所の立会調査

本陵は、奈良市山陵町にある全長約130mの前方後円墳で、佐紀丘陵の西端に築造されている。この度、経年により傷んできた陵前の見張所を改築することとなり、見張所基礎部や配管箇所の立会調査を実施することとなった。調査は、平成13年12月17～20日に本部職員と畝傍陵墓監区事務所職員が立会い、その他工事期間中は同事務所職員が随時立ち会った。

第36図に、試掘地点と見張所改築箇所・水道管理設箇所・水道管理設箇所の断面図を示した。まず、見張所改築箇所は、5.5×5 mの範囲を深さ40cm掘削した。その結果、断面で4層を確認した（断面図1）。I層は表土、II層は既設見張所の基礎が設置されていたと思われる砂礫層である。III層は黄褐色のマサ土で東端部で見いだされた。IV層は検出レベルが陵前坪所周辺の水田面と同じであること



第36図 称徳天皇陵 立会調査箇所位置図 (1/800) 及び断面図 (1/80)

と、暗灰色粘質土であることから、水田耕土と考えられる。このことから、拝所は本来あった水田を埋め立てて造られており、Ⅲ層は拝所整備時の盛土と考えられよう。水道管埋設箇所のうち断面図2は、16×0.5mの範囲を深さ30cm掘削した。その結果、断面で4層を確認した。Ⅰ層は表土、Ⅱ層は灰色粘質土で、見張所改築箇所との対比から拝所整備時の盛土と考えられる。Ⅲ層は黄褐色粘質土が多く含まれている灰褐色粘質土である。Ⅳ層は地山である。ここでは、水田のものと思われる耕土が確認できず、また隣接地は畑となっている。このことから、Ⅲ層は畑の耕作土だった可能性が考えられよう。

上記以外にも電気管・排水管埋設箇所など、掘削を伴う箇所についてはあらかじめ試掘を行ったが、掘削深度はいずれも周辺の水田面とほぼ同じレベルに止まっており、工事に支障のないことを確認した。また、遺構・遺物は検出されなかった。

上記の結果を踏まえ、工事は予定通り実施した。

(清喜裕二)

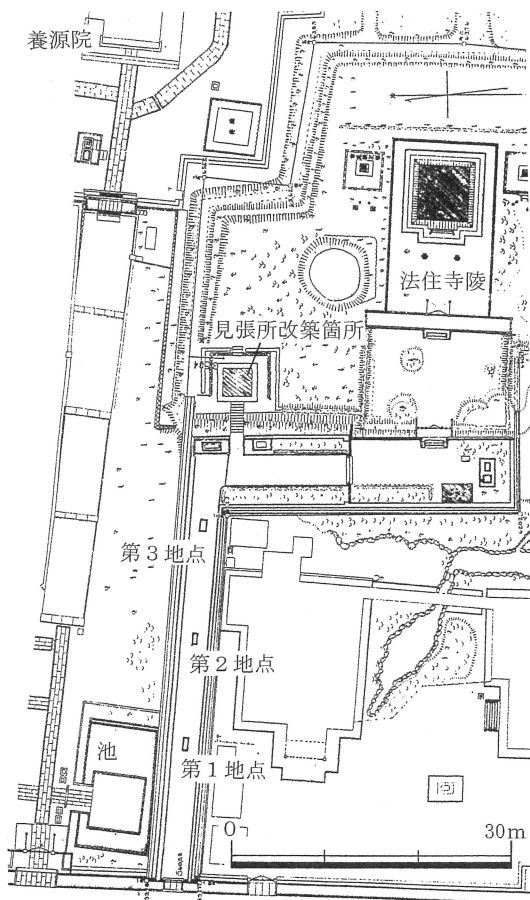
後白河天皇法住寺陵見張所改築工事箇所の調査

後白河天皇法住寺陵は、京都市東山区の三十三間堂の東南に位置する法華堂である。この付近は後白河上皇の院御所である法住寺殿の跡地に当たっている。

この度、その見張所を改築することになり、平成13年12月13～16・18日に、見張所改築箇所（約8.7㎡、深さ0.5m）、および給排水管埋設箇所（長さ約50m×幅約0.5m×深さ0.3m）のうち、3箇所（各長さ1～1.5m、幅約0.5m×深さ0.3m）の掘削に立ち会った。また、翌年の1月16・18・29～31日と2月8日には、給排水管埋設箇所の残りの部分と参道入口部下水管本管接続箇所（長さ約1.5m×幅約0.9m×深さ1.65m）の掘削に立ち会った（第37・38図）。

見張所改築部分は、参道の奥まったところ、法華堂の北西に位置する。見張所や法華堂が位置する箇所は、参道に比べて3m以上の比高差があり、周辺地形や古い地形図などを参考にとすると、本来は法華堂から参道にかけて、緩やかに下降する地形であったと考えられる。

この部分は、北側と東側をそれぞれ最大約1



第37図 法住寺陵調査箇所の位置図(1/800)